

---

# 嘘つき華神？

小宮山蘭子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘘つき華神？

### 【Nコード】

N7775H

### 【作者名】

小宮山蘭子

### 【あらすじ】

カレンさんVS王森？犯罪の出てこないミステリー企画×夏ホラー企画。エキシビジョン・マッチです。

## (前書き)

はじめての方は、予め、拙作「嘘つきカレン」と「華神<sup>かしん</sup>」を読んでからお越しくださいます。

光町商店街。

このように小さな下町の一角で、新たな絵の「題材」を見出すことができるなんて、思いもよらなかった。

その女は、ピザ屋で働いていた。

化粧気のない顔で黙々と働き、息を殺して暮らしているように見えるが、私の目はごまかせない。

新しい題材に出会えた歓喜に、私は思わず「クッ」と笑いをもらした。

ピザ屋の向いに文具屋があり、学生らしき青年が店番をしていた。

私はその店に入っていき、スケッチブックを買い求めた。

そして、その青年に尋ねた。

「向かいのピザ屋、流行っているようですが、あの女性が経営者ですか？」

青年はジロジロと私を眺め、

「そうだよ」

と、素っ気無く答えた。

ピザ屋の店先で流れていたカンツォーネが途切れたため、女が出てきて、テープを取り替えた。

女をじっと見つめる。

やはり、美しい女だ。

逃してはならない。

その間、私をいぶかしげに見ていた青年は、

「絵を描く人？」

と、尋ねてきた。

「…………ええ。少し」

そこに、一人の男が入ってきた。

「いやあ、たまげたよ」

「ツネさん、どうしたの？」

青年が声をかけると、ツネと呼ばれた肥満の男は汗を拭きながら、

「今日は大変なものを見ちまったよ。隣町の公会堂で」

「公会堂？ ああ、『なんでもかんでも鑑定団』の公開収録がある  
と言ってたっけ」

「そこで、あの『華神事件』のウォンなんとかってヤツの絵が出た  
んだが…………」

華神事件。

その言葉に、私は目を細めた。

そうか…………今ではあの絵のことを知らない人は、いないのだ。

こんな小さな町の住人までが、「華神」の名を口にする。

「持ち主は何年も前に香港で買ったって言ってたな。まだ無名のこ  
ろの作品らしかったが、数千万もの値がついてたよ」

「へえ」

青年は興味なさそうに、手元の本に目を移した。

「なんという絵ですか？」

私がそう口にするると、ツネという肥満の男は、少し驚いた顔になり、

「さあ、名前なんてわからねえなあ。なんか綺麗な花の絵だったが」  
そう答えると、文具屋の青年に耳打ちするように言った。

「こいつ誰？」

青年は首をかしげた。

私は文具屋を後にし、『ヴィータ』に向った。

「いらっしやいませ」

女の声を聞いたのは初めてだったが、イメージしていたとおりの可  
憐な声だった。

「どれになさいますか？」

私は黙ったまま。

じつと女の顔を見つめた。

長い沈黙。

女は耐えられなくなったのか、ふと私が携えていたスケッチブックに目をやり、

「絵を描くの？」

と、唐突に言った。

「ええ」

「私も好きですよ。もっとも、描けはしないけれど。美術館めぐり、よく行ってたわ」

「……そうですか」

思ったよりおしゃべりだ。

だが、もうしばらく女を観察したかったので、私は無理に会話を進めた。

「好きな画家は？」

「特にいないわ。でも、亡くなった祖父がピカソと親交があったので、私も会ったことあるわ。とても優しい人だったから、彼のことは好きだけれど」

「……」

「で、ピザ、どれにします？」

私は、黙って『ヴェータ』を出た。

向かいの文具屋では、青年と肥満男が、笑いをこらえたような歪んだ顔でこちらを見ていた。

どこか違和感を覚えながらも、私はその後何度も商店街を訪れ、女

を観察した。

そしてある時、私の破滅は、思いも寄らぬ形で訪れた。

今日こそは女の焼いたピザを買い求めようと『ヴィータ』に入った途端……

私は、ウィンドウの後ろから飛び出してきた三人の男たちに取り押さえられた。

「今日は逃がさねえぞ！」

「伊吹さん、このまま交番に連れていきますか？」

伊吹と呼ばれた男が、しゃがれた声で言った。

「カレンよ、こいつに間違えねえな？」

「わかりません。でも……」

男たちの背後から、女の声がした。

「その人が来るようになってからだと思えます。みなさんの下着が盗まれるようになったのは……」

私は、商店街で横行していた下着泥棒と間違えられ、取り押さえられたのだった。

笑止。

交番で、私は黙秘を通した。

本当のことを言っても信じてもらえないと思ったし、黙っていても私の身辺を調べればすぐにわかるだろう。

そう、私が本当に絶望したのは、この後だった。

一人の女が、交番に飛び込んできた。

女は、私の名前を叫んだ。

「ヒロシ！ あんた、なんて真似を……！！」

「え、どうしてここに!」

それは、私をこの世に産み落とした女……つまり、母さんだった。

「おまわりさん、すみませんねえ。下着泥棒だなんて、まったくもう恥ずかしいっいたらありやしない!」

「息子さんはずっと黙ったままなんですがね。学生証があったので、お宅に連絡させていただきました」

「……母さん、ボクやってないよ」  
ポツリとつぶやいた。

「カレンさんに絵のモデルをお願いしたくて、勇気が出せずにうつっていただけだよ」

「絵って……あんたまだそんなことを?」

「絵のモデル? 君、絵を描くのかい?」

「……はい」

「でも、高校の先生に言われただろ? あんたは体育会系なんだから、ちゃんと部活に出なさいって。いやね、おまわりさん、この子あの『華神事件』の画家のようになるとかなんとか夢みたいなこと言い出して、美術部に入ったのはいいけど、あんまり下手くそだから退部させられたんですよ。だからあたしも、サッカー部に戻りなさいって言っただんですけどねえ。どうみても、あんたの絵は幼稚園児みたいなんだから、無理だつてば。それをこの期に及んで、綺麗な人にモデル頼もうなんて、身のほど知らずもいいところだよ。拳句に下着泥棒と間違えられた? あたしや顔から火が出そうだよ、まったく……」

「いやお母さん、そう言わんでやってください。男の子ってのは、そういうものに憧れるんですよ」 ははは

「本当に、下着泥棒はやってないんだね、ヒロシ?」

「はい、やってません」

私の……

いや、ボクの旅は、終わった。



美術部を退部させられた、先月の午後と同じ、太陽の下で。  
やっぱり、サッカー部に戻るうっつと。

おわり

(後書き)

これは、公言していた「華神の続編」ではありません、念のため  
笑)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7775h/>

---

嘘つき華神？

2010年11月3日02時20分発行